

教師研修の課題（三）

現代版阿闍梨の課題

小山典勇

はじめに

この二年間の経過を省みると、智山伝法院の当初の課題は「社会の諸問題に応えていくには」であったが、それは今年度は「教学の現代化」に観点を移行した。しかし、どのような観点からあれ、同和の問題、八五〇年御遠忌の問題、宗団教化の問題としての「つくしあい」の三は我々の試金石として眼前にあることに、ちがいはない。

筆者は、前記三課題の中、「つくしあい」の問題に関心を持ち、それを検討する前段階として「教化とは何か」について考案を試みた。その理由は、教化と言う言葉の意味や内容には曖昧さがあり、したがつて教師の受け止め方も多様だからである。例えば、教化と言い、布教と言い、伝道とも言って、各々その意味するところが違うようである。また教化は個人的な資質や熱意の有無で片付けられてしまいがちである。教師はすべてが布教師である、称号のある・ないの問題ではないとも言われるが、結局はその時だけの掛け声に終わり、その為の諸方策は見られない。「教化とは何か、その意味や本質は何か」が曖昧であり、しかも教師が共通理解している事でもない。したがつて教化を視点とする教育・研修も行われてこなかったのである。つまり「教化とは何か」が我々教師が登る共通の土俵

であり、出発点なのである。この基本的立場は現状の教化活動を検討する指標であり、ついには教学そのものにまで批判を迫るものである。この意味において「教化とは何か」は教師の總てが避けて通れない基本的、重大な問題となってくるのである。(教化とは何か、についてその後まとめたものを付録とした。ご叱正、ご批判をお願いしたい。) このような視点から考察を始めた結果前号では、教化推進を阻む最大の曲者は実は我々自身が学び、我々自身を支えている(と思われる)伝統教学であると推測した。専門的で繁雑な伝統行事の執行(事相)とそのための知識(教相)が我々を金縛りにしてきたのであり、今もそうである。伝統と権威の御旗は現実に生きるという営みを見る目をふさぎ、苦惱の声を聞く耳を閉ざしてきたと言つてさえ過言でない。伝統教学、およびその体質は伝統行事・儀式を中心とする今日の寺院活動の所々に現れ、その弊害は寺庭婦人の位置付け問題に見られるとおりである(『智山教化研究』・一九号・総合調査分析研究を参照)。また「つくしあい運動」を必要とする問題提起もあるいはその挫折も共に、この伝統教学の体質の両側面に見いだすことができるであろう。

本論では、教化の視点に立つて、教化活動の実践者、主体者である教師と教学とのあり方を検討し、教師研修の課題の(三)として「現代版阿闍梨の課題」を模索してみよう。

寺庭婦人に妻・母・職業婦人・信仰者の四面があるように、住職にも夫・父・宗教法人経営の責任者・寺院住職としての真言行者の四面が考えられる。生きていくことの意味を問うという知的営みについて、住職・教師という人間がどのように取り組むか、その筋道を考察してみよう。昔、阿闍梨として尊敬された教師像を今日的に再現する為にそのあり方を検討することである。その過程で一に教学のあり方が最大の問題となる。二には寺院という組織・機構・運営などが検討されることになろう。この二つを手掛かりにして、宗団レベルの課題提起をしておきたい。これらに貫して流れる批判の目が「教化とは何か」に由来するのであり、具体的には「宗団教化の理念」にかかる問

題である。この意味において「つくしあい」を検討していく一提言としたい。

一、何故、阿闍梨が問題となるのか

我々は学習・修行の成果として僧階というランクに位置付けられている（智山派僧侶及び教師規程参照）。そこで僧階と教化活動の関係から教師の実状を検討してみよう。総合調査によると、本宗の教師は、僧階で六級以上の教師が四十三パーセントに達している。僧正階級の若年令化を避ける為に昭和六十一年、年令制限が設けられた程である。ちなみに僧階の分布図を見ると、中僧都一二・四、権少僧正一二・一、権大僧都一〇・三、少僧正九・二である。僧階の中では権少僧正一九・〇、権大僧正一四・四、中僧都一四・二、少僧正一三・一、権中僧正一二・三、権大僧都一〇・九の順であり、これらに集中し、いずれも一〇パーセントを越えている。このように僧階の若年令化が進んでいる事情には大正大学卒業という学歴上の問題が大きいようである。

さて僧階別に見ると、伝統行事については破線のようにバラツキている。ところが教化活動については権少僧正を例外として、他はほぼ横に並んでいる。これは配布している資料についても同様で、僧階間に大差は見られない。

伝統行事から見れば、住職・教師という人間の資質に関する要因よりも、その行事つまり寺院の歴史的な経歴が優先しており、それが僧階間の数値上のバラツキとなつて現れていると思われる。

次に、一般論として経済的基盤が強い寺院は弱い寺院よりも教化活動の数が多いとされるので、経済的基盤の強い寺院についてその内実を検討すると、経済的基盤が強い寺院が総て百点満点であるわけではないことが分かる（逆に弱い寺院だから何も活動していないとは言いきれない）。教化活動や配布資料については、僧階による開きが見られない（ただし、権少僧正を例外とする）。つまり伝統行事の実施の有無は寺院の歴史性がものを言うが、教化活動や

配布資料については、教師の姿勢や取組み方が大きく述べられており、したがって教師の資質が検討されなければならない課題となる。本論では特に六級以上の教師のあり方を検討することにしたい。さて六級以上の資格取得については、伝法大会・伝法灌頂が義務付けられている。ここにおいて教師は、一個人から阿闍梨として後進を育成・指導する役割が生じてくる。宗団組織における指導者層に連なるのである。したがってその資質として、識見、人間性、宗教性が問われるることは必然である。

周知の事であるが、『大日經』に阿闍梨の徳が示されている。ちなみにその十三の徳は次のようである。「①菩提心を発し、②妙慧と慈悲があり、③兼ねて衆芸を綜べ、④善巧に般若波羅蜜を修し、⑤三乗に通達し、⑥善く真言の実義を解し、⑦衆生の心を知り、⑧諸仏菩薩を信じ、⑨伝法灌頂等を得て妙に曼荼羅の画を解し、⑩其の性調柔にして我執を離れ、⑪真言行において善く決定することを得、⑫瑜伽を究習して、⑬勇健の菩提心に住む」である。これらを目安に現代版阿闍梨の徳を探つてみよう。

二 現代阿闍梨を探るポイント

寺院の一般的な状況は、住職・教師の高齢化、また寺庭婦人の位置付けの不明、二世代教師の存在などの諸問題に直面している。さらに住職は家庭人として夫であり、父親である。組織的に宗教法人を代表する責任者、寺院運営上では真言密教の修行者という四つの顔をもっている。それに加えて真言宗智山派を構成する一員でもある。このような住職の諸状況に一貫して流れる思想的根拠、あるいはそのあり方を問い合わせるものが、繰り返し述べてきた「教化の視点」である。この立場から次の十項目を現代阿闍梨の徳として考察を進めよう。

- ①学び方、何を学ぶのか
- ②寺院運営の視点
- ③宗教法人経営の視点
- ④後継者養成の視点
- ⑤真言行者の原点とは—護摩

教師研修の課題（三）

供修行⑥住職の定年制度の導入へ⑦臨終の覚悟とは、その視点⑧兼職住職をどう見るか⑨伝統教学を切り捨てるか⑩二十一世紀を目指した展望があるか、新しい教学への視点は—社会の諸問題に応える新しい教学体系・ヴィジョンを作りへ。

①学び方、何を学ぶか——人間らしく生きる道を学んでいく——

何故、学び方などという初步的な事が問題となるのであろうか、疑問に思われるかもしれないが、ここには大きな落し穴があるのである。「何を学ぶか」が明らかになつていれば、この落し穴に落ちずに飛躍できるのである。「何を学ぶか」それは「人間らしく生きるには、その生き方は」である。「自分は一人の人間として、どう自分の問題に取り組み、自己に内在する矛盾を解決していくべきか」であり、これは「社会の一員として、現代社会の歪みや不条理にどのように対処していくべきか」である。そして「このことを常に問い合わせていく知的・情的な営みが学び方である」それは「教化活動によって実践的、体験的な裏付けを必要とするもの」である。回りくどい表現になつたが、要は「それは何故なのか、どういう意味があるのか、それでどうなつっていくのか」を常に自分に質問していけばよいのである。その営みが筋道であり、その繰り返しが古い自分を洗い治し、新しい自分を生みだしていくのである。

教学の落し穴とは何かと言えば、教学とはその出発点においては「生きていくことの意味を問えば、そのより所となり、指針となるもの」であった。しかし、その指針が形式化し、固定化して教学体系となると、当初の生々しい息吹きが消えて、祖師、先徳の意図とは全く離れ、思つても見なかつた結果となる。つまり生きて行くことの意味を尋ねることから始まつたことが、後世の者には「学ばなければならないから学ぶ」「学ぶための学び方」に質的変換し

ていることである。これが落し穴の第一である。

また次のような落し穴もある。それは「教学（伝統教学）はそれ自身に差別性を含み、差別構造を作り、差別体質を内在している」ということである。

教学という場面における人間関係を考えてみれば、教える者と教えられる者という関係で成り立っている。教える者と教えられる者との二者を区分けするものは知識（伝統教学）の量である。知識の量が師・弟の二者に分けるのである。「ここに人間性や人柄を持ち込むと話が進まない。言い換えれば、ここに人間性を持ち込む必要があると言いたいために両者を区別して話を先に進めよう」

教える者は知識の量が多く、教えられる者はそれが少ない、この違いが次のように展開していくのである。知識は第二に富につながり、財を生み出す。つまり知識の量の多少は経済的な利潤に開きを生みだす。例えば、魚釣りを考えてみよう。どんな魚が釣れるか、川の場所はどこがいいか、天候の具合はどうか、さらに釣りの経験など、知識の量が多ければ、それだけ多数の魚を収穫することができる。反対に知識の量が少なければ、魚の収穫量も少なくなる。結果として知識の量の違いが、富める人と貧しい人とを生じることになる。知識は第三に貧富の差を生み、排他的な集団を形成する。富める人はその知識および財力が自分の手中に集中するように努め、それは排他的な集団を形成するに至る。端的には肉親、親族、一族の連帯が強まる。知識は第四に権力を生み出す。貧しい人は、財を求めるために知識を求め、そのための代償を惜しまない。そこで貧しい人同士が互いにライバルとなり、競争する。そうなりば、知識は益々高く売れる商品となる。富める人はいよいよ閉鎖的な集団を形成し、知識の権威の下に権力を生じる。それは肉親、親族、一族で保持され、世襲化によって維持されていく。家元制度はその典型である。富める人は知力、財力、権力、を握り、特權階級を組織する。結果として、支配・被支配の人間関係、階級社会が形成されるこ

となる。これは教学自身がもつ体質である。

教学とは生きることの意味を見いだしていくプロセスである。それは始めは指針であったものが結果として教学体系としてまとめられていったものと考えている。ところが「伝統教学は」その当初の意味を模索することではなく、「伝統を継承し、維持していくもの」であると自らを誤解してしまっているのである。しかも伝統教学それ 자체が差別体質を含んでおり、閉鎖的、硬直化していることにさえ気付かないものである。これが教学の現状である。

一体誰が、このような伝統教学に問題がある、と疑問を投じ、寺院や宗団の体質を糺したのかと言えば、それは「教化活動にたずさわる現場の教師であり、その生の声」である。しかしながら、その声は放置されたままである。今日だけの問題ではない、遙かに江戸時代以来の伝統教学と教化との大問題なのである。現場からの訴えは、現代風の表現をすれば、檀信徒への迎合である、教学のレベルではない、習俗だ、民俗信仰だ……と一蹴されているのである。

伝統教学は現場の生の声を真摯に受け止め、その問題の重要性に気がつかなかつたのである。まさに伝統教学は「因果の子」でさえある。

したがつて「伝統教学は、教化活動という実践活動によって常にその内実を批判され、その意味するところを検証されなければならない」ともいえる。ここに至つて始めて、伝統教学と教化活動の実践事例とに「共通の土俵」が用意されることになる。この共通の土俵は教師総てが参加する場である。何故なら「人間らしく生きる筋道、生きることの意味を問う」という誰にも共通する根本的問題が検討される場であるからである。仏教史を省みれば、その動きは「結集」であり、そこにおける討議の内容が各種の經典となつて展開してきたと言えよう。

再び人間関係から考察すれば、住職・教師・檀信徒という関係は「教化活動する立場」と「教化活動される立場」と区別される。従来の教化の考え方とは、住職・教師側に立つた「何を教えるか、どう教えるか」の発想である。これを

逆転して「教化活動をされる側の立場」に立つた「何が問題か、何故問題なのか」を追及していく姿勢が、筆者の言う「教化」の発想である。教化される側とは、表現上のことであって、その内実は住職も檀信徒も共に「生きること」の意味は何かを問い合わせること」に他ならない。

学び方の第三として、檀信徒とはどんな意味をもつているのであらうか。一般に、檀信徒をみればその住職の考え方も、力量も、教化活動の程度も分かると言わわれている。教化活動に対する自己批判を含む率直な表明である。この言葉の意味するところを考察してみると、つまり檀信徒とは住職・教師の総てを、長所も欠点もありのままに映し出す鏡なのである。自分の今を計る物差しと考えてもよい。檀信徒との触れ合いで質疑された事柄には、我々が見過ごしがちな問題が含まれている。したがって住職が学ぶべき事柄を提供してくれる教材であるとも言える。さらには住職の修行者としての修行を支援してくれる応援団でもある。ここにも教化活動の必要性があることが理解されよう。

次に口頭発表における質疑を紹介して、筆者の足りない点を補つておきたい（△印は質問、◆印は答え）。

◇社会の諸問題とどう関わるのか。◆この質問は、伝統教学と現実との諸問題には開きがあるが、そのズレをどうするのか、という観点から考えてみよう。教化活動の実践を通じて檀信徒が当面している諸問題を把握し、何が問題になっているかが分かる。極めて身近なことではあるが、それがいわゆる社会の諸問題に連なる大問題の一部であると受け止めるべきである。今何が問題になっているのかを気がつくことが先で、どう答えるか、対処するかは次の段階である。それは別の研究課題として各種の研修会で論じられるべきである。

◇ご法事などで「そこはかとなく、有り難いものを感じる」という檀信徒の気持ちは無視できないのではないか。ありがたいという意識をどう考えているのか。◆ご法事の席に有り難い雰囲気を作り、尊さを演出することは意味があると考へてている。しかし、意味も知らずに「ただ有り難い」という気分でよいのだろうか。その場の感情を納得で

きる主旨説明やその事柄の意味合いも、あわせて必要ではないのか。気分的にも理論的にも、参加者が自分で納得することが大事である。それが生きていくことの意味を探ることにつながっていく。（これから檀信徒像として、自分なりに考えていくことができる檀信徒という、小室裕充師の意見を参考して）

◇教師になるまでの教育体系はどのようなものか、それが阿闍梨の件よりも緊急の課題である。また教師の信仰形成の筋道についてはどうか。◆筆者は具体的な回答は用意していないが、例えば『智山教化研究』八号以来発表されている子弟教育に関する、諸研究がある。また教化講習所において、養成科は法話、研修科は文書伝道、特別研修生は行事・事業について企画・立案・運営・組織化ができるなどを、目標としている。そのための諸学習プログラムなどが現在実施されている。これらが教育体系や教師の信仰形成について参考となる。（なお本論において、⑤信仰形成の筋道について⑥真言行者の視点から⑦臨終の覚悟とは、その視点の各項で、まとめてみたので、それをこの質問の答えとしておきたい）

②寺院運営の視点

教化の目標は何か、その寺院独自の目標を設定する。教化の目標とは最終的には阿闍梨である住職の「そつくりさん」を作ることである。それは子弟や檀信徒の別を問わないことは前に述べたとおりである。次に目標に向かうための具体的な教化活動の諸方策を検討しておく。まず現状の寺院活動は行事中心であり、それだけでは限界がある。そこでその寺院の年間教化活動の体系化を図る必要がある。形式的には定期的、連続的、段階的であること、運営的には教え・理論プラス実践、実習を伴うことがポイントである。このような枠組を設定し、関心のある教化活動・テーマを軸にして、年中行事や諸活動と相互補完的な働きを持たせる。実習には見学研修として総本山参拝、親睦旅行な

ども考えられる。これらの具体策は『智山教化研究』に報告されている。

人材面から見ると、住職と後継者との競合や確執を避ける為に役割分担を明確にする。青年教師の悩みは、法事にしても何にしても住職と競合することが自分にとって今の問題であると率直に訴えている。行事中心の寺院運営では教師の出番も限られてくる。したがって教師の個性・技能を生かした教化活動を主体とする寺院運営に切り替えていくべきであろう。

次にこの役割分担は教化活動の運営についても言えることである。教化活動あるいは行事についても、住職あるいは後継教師、寺庭婦人などの寺院内の人間で進められるものではなく、檀信徒も直接運営に関与する必要がある。例えば、教化活動の推進には様々な役割が考えられるが、ピアールの為の広報活動担当、受け入れ・接待担当、実践部門担当、庶務・会計担当などが考えられる。ここで実践部門というのは、月並み護摩供と言えば経頭、灯明・点香、太鼓などの諸役を指す。

このような役割分担による教化活動の運営には以上とは別に大きな意味がある。寺院の世襲化が一段と進んでいる現状が放置されるなら、やがて住職による寺院の私有化が問題となることは明らかである。檀信徒が教化活動に参加し、役割分担をするという寺院運営は、閉鎖的になりやすく硬直化しやすい組織体質を洗い、寺院がもつてている宗教性を本来的に開放していくことになる。世襲化は避けられないにしても、私有化は避けられるのである。

③宗教法人経営の視点

寺院の世襲化が進んでいることは既に総合調査の分析研究で指摘されている。今後は寺院の私有化、さらには私物化が進んでいく事が予想される。私有化、あるいは私物化が批判される理由は、万人に開かれてるべき寺院の門戸

が閉ざされてしまうからである。伝統と権威の名の下に閉鎖的な宗団運営が築かれてきたことは前項で述べたとおりである。

今日の問題としては宗教法人の責任者（つまり代表役員）として、どのように寺院経営を図るかである。その一例に会計処理の問題がある。住職は税務上、当該宗教法人から給与を支給されている身である。しかし、その給与となるものは檀信徒からの布施収入である。一般に人々は、寺院は布施により成り立ち、僧侶は布施による生活であると考えている。檀信徒は布施という意識があるので、住職は寺院経営という姿勢、給与という感覚である。住職・教師は宗教法人である寺院から生活費として貰つて当たり前という気持ちが芽生えやすい。つまり住職の金銭感覚の問題と宗教性との問題である。

ボランティア活動の重要性が各方面から呼ばれている。仏教的には布施行であるとも言われている。ボランティアと言い布施行と言うも、人々の財力、時間、経験を費やしての活動である。しかし、住職の場合はそうであろうか。例えば地域作りの会がある。人々は休暇や余暇を利用して参加するが、住職の参加は休暇や余暇なのであるうか。むしろ住職には勤務時間中の業務になるのではないか。極めて厳しい条件下にあると言える。

教化活動の拠点として、宗教法人の恩典を生かした寺院経営が住職に求められている。その一是現在地を拠点としての問題であり。その二是都市化、過疎化であれ、現在の本堂のある現在地だけでは教化活動の限度が知られているのであるから、新しい寺院活動の拠点作りも重要な課題である。つまり人口集中地帯への拠点作り（新しい寺院作り）が図られていくべきである。そこにおいて、それまでに蓄積した教化活動のノウハウ、および人脈が最大限に發揮される。ここにも教化活動の必要性が知られるのである。

④後継者育成の視点

住職として、どのような寺院作りを目指してきたのか、どのような教化活動を実践してきたかが問われる場面である。特に便壇灌頂における大阿に要求される問題である。大阿として、受者に向かって、自坊における教化活動の実践、およびその経験から身についた知見を語る必要がある。それは紀行文風に言えば、マンダラ世界の最外院から諸尊遍歴の心の旅路に外ならない。この場面が法を伝えることは明らかであるが、その法とは教化活動によって身につけた識見、人間性、宗教性であることは言うまでもない。

現実的には、受者は感情的に緊張し、興奮状態であるから、大阿としてはその気持ちの高ぶりに意味を持たせ、将来への方向性を指示しておくべきである。本尊に巡り会えた喜び、仏法を学ぶことの意味合いが、教化活動の実践によって具体的に確かめられ、深められていくことを説き明かすべきであろう。

⑤真言行者の視点

真言行者として靈験を経験すること。言い換えれば神祕体験を体験すること。既に加行において、いわゆる四度次第に基づき、十八道をはじめとし不動尊護摩供を実修している。これは私たちの原点である。特に不動護摩供の修練は神祕体験を経験することができる最も身近な実践方法である。真言行者の修行とは何かが大きな問題となるが、筆者は心の働き方の問題として考察をしている。護摩供で注意された事柄は、内面の護摩供が重要であり、それは自己の心中の汚れ、つまり煩惱を焼き尽くすことであると。

この指摘に従えば、行者として日々に護摩供を努め、内の邪心を焼き尽くすことである。この邪心を捨て、邪心を離れた心境は、臨終の用心として要求されているのである。ちなみに靈験や神祕体験といえば、現代的な教化には無

縁のように聞こえるかもしない。それは多くの場合、靈験や奇跡を超能力によるものと考えるからかもしない。また今まで教化の場での靈験や神秘体験が直接的に話題となつたり、語られなかつたからかもしない。さて筆者は靈験とは修行者に対する最大の贅沢であると考えていて。言い換えれば、その人間性、宗教性による感化力である。精神的な力強さ、粘り強い人間性を養つてくことが靈験である。人間的魅力、包容力、達観性、枯れている、様々な表現で言い表し得る人間性である。その人柄に接して自分が分かつてくるようなレベルである。

交通事故に出合つたが奇跡的にかすり傷ですんだ、持つていたお寺のお守り札が割れていた。お守りの札が自分を救つたのだ、このような話はしばしば耳にするところである。しかし、今の筆者の教化活動の領域には、このような事柄を靈験であるとは考えていない。筆者が主張したい点はどのようにして信仰心を深めるか、その道筋に重点があるのであつて、結果云々で言うべきものでないと考えているからである。

さて行者という言葉は、修行者に由来すると思われる。そしてその修行の意味合いは滝にうたれたり、あるいは山岳にこもるなどして行われる実践、実行と理解されている。体の働き方からこころのあり方を一定方向に向かわせるものである。ややもすれば、表面的な形式が重視されがちであるが、筆者はむしろ、より深くこころのあり方を考察して行くべきであると考えている。まだ推測の段階であるが、修行の行をこころのあり方、こころの仕組みの一つとして検討したい。こころのあり方とは、五蘊無我における第四の行（サンスカラ）である。これは諸法の立場に移せば、有為（サンスクリタ）および無為（アサンスクリタ）として展開する。そのあり方は、言葉を変えれば、諸行無常の行として生成流転するあり方である。

激しく体を運動させる、刺激させるにしても、静かに沈思黙考するにしても、いずれもこころのあり方を見詰めるものと考へるからである。

目指すところは精神的な粘り強さ、集中力に富んだ人間の育成が考えられる。

⑥住職の停年制の導入へ

名譽住職制度の問題が話題になるが、これは住職の停年制の問題でもある。ただそこでの議論は宗団内における発言権を巡っての、父・子の争いである。また高齢化が宗団の停滞につながるなどの理由もある。

住職に停年制を導入する意義は何であろうか。人生経験豊かな住職に新たなる飛躍を期待したいからである。その為には一寺院に止どまる事なく、新天地を求めることが考えられる。人口集中地帯への新寺院建立もその一つである。そこに自分なり、青年教師を派遣するのである。あるいは諸国遍歴の旅に出ることもあり得る。諸国遍歴の旅を支えるものは、長年友好を暖めてきた全国各地に点在する寺院住職であり、檀信徒である。これが成り立つたには、宗団人としてより緊密な信頼、協調の人間関係が築かれていることが必要である。あるいはそういう人間関係を築いていくことを宗団の目標とすべきであろう。(この主張は裏を返せば青年教師が外に出て行くことでもある。それだけの実力をもった青年教師を育成する必要がある)

遠く古代インドでは、老年期の生き方として諸国遊行の生活が理想化されている。釈尊もまたその一事例である。その背景には豊かな農産物や産業の振興によって在家から出家修行者への布施活動の支援があったことは知られているとおりである。

諸国遍路で協調される点は、本来無一物の境地であり、物質から生命までの執着を離れる修行実践である。この点を見落とせば、単なる老人福祉に変わらないものとなる。この無一物の意識は次項に関連する。

教師研修の課題（三）

⑦臨終の覚悟とは、その視点

臨終の問題を扱うには二つの場面があると考えている。その一は今日関心を集めているホスピスに関連するものである。臨終、その前段階という特別な場面を問題にするものであり、その諸方策である。その二は平常の一瞬一瞬の連続が臨終の一瞬に相通じるものがあると考え、平常を重視する立場である。この方面では皮肉な表現であるが「死の方」をテーマとする出版物が目について多くなっている。

ここでの問題は、つまり臨終の覚悟とは平常のこころのあり方にほかならないことを協調したいだけである。臨終の身体的変化は、手足など末端から感覚が失われ、目、耳などの視覚、聴覚が失われ、最後に意識のみの状況になる。その意識はまず表面的意識が薄れ、ついには深層の意識のみの状況になる、と考えられる。このような感覚、意識構造は瞑想における意識形成と同様な過程であると考えられる。それは前に述べた「こころのあり方としての行」の問題でもある。臨終において最後の最後に、一番の深層部に何が集積されているかが問題である。この点に着目すれば、平常時のこころのあり方が大問題であることは明らかであろう。

⑧兼職住職をどう見るか

次の三項は智山派の一員として、智山派の指導者として問われる問題である。その一は宗団を形成する寺院住職・教師をどう見るか、見る目の問題である。総合調査で指摘されているように、寺院の経済的基盤により、寺院の格差が生じ、それは住職、教師の一極化に進展しているといふ。住職、教師としての出発点であった「いかに生きていくか、生きることの意味を問う」という視点に立たなければ、この一極化は今後、別の世襲化などの問題も絡んで、より深刻化するものと思われる。経済的な問題を解決し、一極化を解消していく切り札は、宗団人という共通意識であ

り、それは教化活動実践者という同信同行の連帯意識であり、それを育成する筋道は教学（および研修体系）である。ここにおいて本論の当初の問題に立ち返ることになる。すでに述べたように、教化は知っているか、いないか知識の量の問題ではない。何が問題であるか、どう考えるべきかを問い合わせるものであるから、専業住職であれ、兼職住職であれ、生きることの意味を共に考えていく立場に立つ。この意味において、宗団運営においても、兼職住職の意識、あるいは経験を無視することができないであろう。考え方のみを記し、具体策は今後の課題とし、宗内の叡知に期待したい。

⑨ 新しい教学を、それは宗団教化の理念である

伝統教学のもつてゐるプラス面、マイナス面を適正に判断する必要がある。この点も述べたところであるが、教化活動の実践により伝統教学の見直しを常に迫る必要があろう。これは個人的な問題であると共に、宗団全体の問題でもある。つまり宗団教化として、一本筋の通った実践、展開が期待されるが、この場合の一本筋のある体系とは新しい教学体系のことである。考え方としては、伝統教学の基本をベースにし、各論としての実践を伴う体系といつてもよい。各論としての実践は、教化活動による裏付けによつて常に修正、補修していくべきものである。信仰心の形成、信仰者の育成は生の教材であり、テキストである。したがつて現実的には新しい教学体系とすべきものである。

教化活動という具体的な問題を展開するうえでは、当然の事ながら、現実社会の諸問題に目を潰れないことは明らかである。そうなれば現実の諸問題が研究の課題であり、それは一つ一つの実践による積み重ね方式で答えが模索されるだけである。しかもそれは個人的な問題解決ではなく、教化活動に携わる全教師の参加方式による実践発表、体

験発表、問題提起によって初めて問題解決に一步進むものと思われる。

宗団の基本線は教学であることに異論はないであろう。しかし、その教学とは伝統的教學ではなく、宗団教化として提案されたテーマを言う。それは例えば、つくしあいであり、筆者の言葉で言えば、このテーマを具体的に展開する上で目標となるものは、個人的にはやすらぎであり、社会的には円満な地域社会ということになろう。

⑩二十一世紀を目指した展望は、新しい宗団への視点は

しかし、このようなありふれたテーマを実現していく前途には厳しい問題が山積している。例えば環境、資源の問題がある。地球的な規模で、全人類にとっての課題にぶつからなければならない。生活が機械化され、人工化されることとしても、人間の生きる営みだけは機械化され、人工化されることにはならないであろう。そうすればやはり苦の解決が最初で最後までの問題である。弘法大師の「我が願いも尽きなん」の時まで教化の視点を離れては宗団はありません。

「付録——私の教化論——」

《前口上》

一般に、教化（布教、伝道）というと、教学や事相から見下されています。評価が正当であるとは思われません。どこに原因があるのでしょうか。

今は「何故、教化（活動）をしなければならないのか」という疑問に答え、「教化は敢えてしなくてもよいのではないか」という声に対しても「教化（活動）は素晴らしいものである」とその意義を明らかにしていきましょう。それはこれまでの布教師各位に対する不適当な待遇を批判し、教化という観点から、教学および事相を再検討して

いくことです。その厳しい責めがいを通じて、共に今を見据えて、今の問題に取り組み、「心豊かな生き方」を学んでいこうではないか、と呼び掛ける魂の叫びです。

『ポイント』

- (一) 教化とは何か、その考え方について
- (二) 教化活動の意味はどこにあるのか
- (三) 教化活動の実践によって見えて来たことは何か
- (四) 教化の本質とは

『あらすじ』

(一) 教化とは何か、その考え方

◇ a 従来の考え方

教相（伝統教学）—事相（伝統儀式）、そして教化（説明の為の教化）。

構造／檀信徒が行事について知らないから、専門家である僧侶が教えることに主眼がある。僧侶自身の「自己の問題」は問われていない。

寺院活動をなりたたせるための補助的、補完的役割。

- ア 教える者（僧侶）と教えられる者（檀信徒）という主従／師弟の人間関係。
- イ 年に一度の伝統行事が中心。特に（伝統）行事とは一般には施餓鬼会、お彼岸など宗派色のないものが多い。

教師研修の課題（三）

祖先中心の行事。

ウ 結果として現代社会の諸問題（→いかに生きていくか）に対して、教師（教学）は無関心、無知、無能力。

エ 僧侶の姿勢、発想、主張は、死者、先祖を主とし、死者といかにかわるか（年回忌）であり、一般は死者の祟りを恐れ、不安を感じている。不幸の原因、背景を先祖のさわり—靈障に逃げ込む。信仰の確立という主体的な動きはない。

◆ b 新しい教化の考え方（従来の用語で）

理念（教相）—実習（狭義の事相）—生活化（従来の教化、これまでここが限界）—社会化（ここに視点をおく、新しい教化）。

上のようない貫した考え方・体系を教化（新しい教学）と呼び、その具体的活動・実践を教化活動（布教、伝道）、教化運動とする。

構造／「いかに生きていくか」の問いは、社会の一員である僧侶自身にも、常に課せられ、自覚されている。これは檀信徒にとっても同じく、重大な問題である。

あ 僧侶も檀信徒も同じレベルにあり、同等・対等、同信同行の人間関係。立場の違いは僧侶側に少しく専門性が要求されることである。

い 日常の教化活動が中心の運営である。定期的（週、月）連続的に開催され、テーマについて参加者が相互に討議、実習することによって、知的に経験的に実践的に、自己を深めていく事ができる。あわせて互いに他を尊敬し、協調していく信頼関係を築いていく営みである。

う 現代社会の諸問題が話題となる。参加者一人一人の個人的な問題や、寺院の存続・廃絶、栄枯盛衰の問題ではなく、地域社会全体の問題を考える場となる。

え 自分が今をどう考え、暮らしていくかが視点であり、活動の基礎である。幸、不幸は過去世の問題ではない。自分でけじめ（＝生死の問題）をつけられる強い精神力が形成される。結果として、一寺院の存続の為の教化ではなく、「仏教が存在理由をもつ根拠」といえるのかどうか、が問われるのである。

(二) 教化活動の意味はどこにあるのか

c 自己の問題に取り組んでいく知的（仏教思想的）、実習的（礼拝、拝み方など事相の一部）実践的営みの体系であるとすれば、それを具体的に展開する諸方策が教化活動に取り組むことによって、自分がどの程度のものか見えてくる。仮の自分から、内実のある自分へと高められる。

d その営みは従来の慣例、伝統に対し「批判、反省、検討する諸事項」を提示することになる。

(三) 教化活動の実践によって見えて来たことは何か

- e 伝統教学・実習のありかたへの批判。教学内容、現代の研究姿勢、教育体制。
- f 伝統的教団の体質、体制への批判。
- g 寺院の組織、運営など寺院レベルにおける諸問題。世襲化、私有化、私物化。教団規則における「時代に適応し、対応できる教団・僧侶」の空文化は教化の本質が理解されず、考えても見ないことによる。

(四) 教化の本質とは何か

何を教えるのではなく、何が問題なのか気がつき、何故、問題なのか自分で考え、現状（自己）自身の暮らし、生き方—それは他者にも共通している、同時代の問題）を批判していく姿勢である。

その視点は「人間らしく生きる」という問い合わせである。生きるにはこの世の事という表面的、皮相的な問題意識によるものではなく、「自己のいのちを貫いて流れるものにふれる」という意味で後生をも含む。

(五) 教化活動のご利益、功徳は何か。「菩薩になれる」

以上のような見通し、展望を自覚して（菩提）、実践的な活動を通じて根源的な自己に見いだして勇氣、情熱、意志、喜びなど知力、体力、精神力を身にそなえていく生き方、それをを目指す人々（薩埵）を菩薩と規定する。

現実的には、教化活動の実践では、自分に対し、他人に対して、意気地なさ、冷ややかさ、怠け心、嫌悪、不信など最悪、最低の経験のみであると言つてもよいが、しかしその経験が以上のご利益を生み、自分にその功徳がそなわってくるのである。

実践の過程で、自分を支え、理解し、応援するものに出会い。その出会いに「ほとけ」を見いだしていくのである。ほとけとは人間の根底にある「やさしさ」「きよらかさ」「厳しさ」と考えられる。人格を持たせれば如来になる。